

十二月二十二日

満典叔父が亡くなった。七十八才だった。元気に大言壮語して止まぬ人であったが叔父なりに自由闊達に生きた。好きな人物であった。叔父も私の事は気にかけてくれていた様で、「アイツ（私の事）は俺に似てるから」と良く言っていたらしい。たしかにホラ吹きグセは良く似ている。通夜も告別式も行けそうにないが、あの叔父だったら許してくれるだろう。十一時半新宿明治通り明和会会長花房氏と会う。明治通りコンバージョンの件。

午後一時ひろしまハウスカンボジアツアー説明会。結局総勢三〇名の集まりになった。応募総数は五〇名だった。六十才過ぎの方が四名程いるのが気がかりだが、考えてみれば私も五七才。十九才の学生もいる。きちんとまとめてレング積みをやってもらうには工夫がいる。プノンペンの渋井さんから二〇名くらいにして下さいの連絡があつて、急いで募集を打ち切りにしなければ五〇人は越えていただろう。ありがたい事だ。しかし何でこんな旅行会社がやればいい事までやらなきゃならんのだと、自問しないでやろう。夕方世田谷でA3ワークシヨップの集まり。千村、丹羽両君が来てくれて世田谷村はにぎわった。車椅子の方が地下訪問は初めての事。しかも二名。しかし流石に車椅子が重かったのか、それとも我家で使っていた冷蔵庫を地下に降ろすのが重かったのか鈴木君が腰を痛めて救急車を呼ぶ始末になってしまった。東京消防庁の方々が地下にくるのも初めての事。早く地下へのスロー

プを作らねばと思いはするが、先立つものが今のところは無い。来年は何とかしよう。聞けば鈴木君は救急車が運び込んだ病院からタクシーで自宅に帰ったの事。若い頃の体は本当に大事にしてみらいたいが、大事にし過ぎてジイツとしても駄目なんで、時に運を天に任せるしかない。その肝心な運は自分で呼び込むものだ。私も十八才の時から始めていた岩登りで、今思えば良く生き延びていたなと思う。二〇才前穂高岳東壁登攀の時雪溪の下に落ちて気絶していた。フト気が付けば上空から青白い光が降りてくる。それに向けて無意識に体を動かしていたら雪の上に出た。途端岩雪崩が私が落ちていた雪溪に轟音を立てて襲いかかった。数秒の差だった。あの時厚い雪溪の下で見た青白い光は何だったのだろうか。今でも記憶に消えぬ。あの光で私は救われた。アンナプルナ連峰の一角で体験した白いおやかな峰々と空が溶け合うところにあつた青白い光のようなものか。ヒマラヤには六〇才前に再び行かねば、あの空と白い大きな峰々のエッジをゆく体験は得られないかも知れない。七〇過ぎたらもう生命力自体がいつニルヴァーナになつちまってもおかしくはないだろうし。しかしネエ、何であんなに危険なことに夢中になつていたんだろうと今思えばゾツとするが、早く止めて、今の仕事に導かれて良かった。

十二月二五日

朝九時一〇分の全日空で沖繩へ。昨日、一昨日と良く休んだ。ほとんど何もせず。文庫本を一冊読んだだけ。良い二日間だった。只今高度三千五〇〇 Feet。南へ飛ぶ飛行機特有の光に溢れたブルーの中に浮いている。

十二時過那覇空港着。昼食後二時半沖繩市役所へ。ワークシヨップN 沖繩の可能性について話し合う。五時名護近くの

ザ・ブテナテラスなるリゾートホテル着。いかにもなりリゾートホテルで気持は一向に休まらないが、それでもテラスからの海、多分こちらは東シナ海だろう、その、いかにも海の荒れぐあいが良いしかった。色んな楽しみ方があるものだ。久し振りにスケッチをする。空港でセキユリティチェックに見事にひっかった鉛筆けずり用ナイフも使ってみたい。

十二月二十六日

朝七時朝食。九時チェックアウト。宜野湾市へ。市長基地策部長課長と面談。普天間航空基地返還に伴うズケラン地区のまちづくりに関して意見交換。二〇〇二年夏のワークショップについても協力支援を依頼する。ズケラン地区を案内してもらおう。太平洋を望むスケールの大きな土地である。土地柄に合ったスケールの事を考えなくてはならぬだろう。アジアのことをするには良い所だという感想を持った。

午後二時過の便で東京へ。これで今年の仕事はほぼ終了だろう。世田谷に帰ったら横須賀市からインタビューの結果が来ていて、残念でしたという結果。仕方ない。次頑張ろう。しかし、あの敷地は良かったな。